『タイ　国民国家形成期(1868-1932 年)における女子教育の展開』に関する研究

平成 17 年度入学
派遣先国：タイ
宮内　春菜

キーワード：タイ、タイの女性、女子教育、国家と女性、国民国家形成

対象とする問題の概要

国王ラーマ 5 世の治世(1868-1910 年)から立憲革命の起こった 1932 年までの期間は、絶対王政の下での国民国家形成努力がなされた。この過程で国王に忠誠を誓う国民の育成が目指されたが、この際国家が女性に求めたことは、家庭婦人として国民となること、即ち男性のように官僚や近代法の受け手としてではなく、家庭で男性を介して間接的に国民となることであった。この家庭婦人として国民たる女性像は国家の理想女性像と位置付けられ、国家は理想女性の育成を目指すことになるのだが、その重要な一手段とされたのが教育であった。 国家による女子教育は 20 世紀初頭から本格的に開始された。当初、西洋列強の進出により主権維持を懸念した国家は、タイの相対的な発展性の指標とすることを目的に女子教育を開始させた。しかし次第に独立の危機が薄れ、国民の育成が国家の課題となっていくと、国民形成のツールとして教育の重要性が認識されていき、女子教育においては上記の理想女性の育成がその目的となっていったのである。

タマサート大学図書館

研究目的

現在、タイの女性に対して我々が抱くイメージの一つに、家庭外で活発に活動し社会的評価を得ているというものがある。実際、労働参加や教育機会等を指標にした女性の地位の国際的な相互比較で、タイは他の東南アジア諸国の上位に位置する。勿論、これは現代タイ女性の多様なあり方の一つに過ぎないのだが、少なくとも家庭婦人たることのみが是とされているわけではないといえる。その一方で過去に目を向けると、国家が女性に与た唯一の選択肢は家庭婦人であった。この家庭婦人としての女性像をして、如何に現代のタイ女性像を説明することができるのか。本研究はこの問題提起に対する答えの基盤構築を目的とし、国家により理想女性像として家庭婦人が定義される背景とその過程を、それが明確に反映された女子教育の展開を切り口として紐解いていく。

フールドワークから得られた知見について

今回のフィールドワークでは、約 3 ヶ月間バンコクに滞在した。研究課題が歴史的内容であることから主に文献研究のスタイルを採用し、先行研究を収集することから着手した。タイの教育の歴史に関する先行研究は数少なく、女子教育に特化した研究となるとさらに数が減り、それも、日本語と英語では見当たらずタイ語論文に僅かに存在するのみであった。それらの大部分がタイの大学修士論文であったため、修士論文が閲覧可能な大学図書館(チュラーロンコーン大学、タマサート大学、シーナカリンウ

ィロート大学）を主な資料収集の場として選択し、加えて国立図書館や国立公文書館も利用した。事前にタイ国立研究所（National Research Council of Thailand）に各図書館や公文書館における資料収集許可を得ていたため、図書館設備を不自由なく利用することが出来た。また、図書館での資料収集の他、現地の女子校にも出向いて資料を収集した。訪問した学校は研究対象期間に設立された現存する女子校であり、タイの女子教育におけるその影響から、本研究で大きく取りあげる学校である。事前に連絡を取り、図書館で同校の司書から学校史のコピーを数冊入手することが出来た。これら学校史は一次資料に匹敵する情報源でありながら図書館などでは入手困難であり、今回の学校訪問の大きな収穫であった。同時に、自身の目で女子校を見、学校史に名を連ねる生徒たちが生活したであろう校内を歩くことによって、遥か昔の歴史、そして自身の研究課題を身近に感じることが出来た。

今後の展開・反省点

今後は、今回収集した資料を精読し、研究を組み立てていく。それと同時に、次回の来タイ時の収集資料をまとめておきたい。特に、今回は時間的に不十分であった一次資料の収集を次回は主に行いたい。今回の反省点は、コミュニケーション能力の不足である。特に女子校訪問時などは自身の研究内容を相手に明確に伝える必要性に加え、日常の会話とは異なるフォーマルな言葉使いを要求されるのであり、今後のフィールドワークまでに是非対処しておきたい点である。

タイ国立図書館